令和5年
１０月　学校だより
ＮＯ．６ 令和５年１０月２日
さいたま市立美園北小学校
TEL　０４８（８１２）２２７７
https://misonokita-e.saitama-city.ed.jp/

In one’s shoes

校長　佐藤　利春

私サイドの対応

私は、この8月に60歳の誕生日を迎えました。小学校の教員として勤め始めたのは、22歳の6月からです。ですから、10月現在で37年と4か月のキャリアです。勤めた学校は、上尾市・鴻巣市・大宮市・さいたま市・山口県柳井市そして、さいたま市の15校です。教諭時代から現在に至るまで、たくさんの子どもたち・保護者と話してきました。はじめのころは、【ただ聞くだけ】【聞いてアドバイスするだけ】さらに、【聞いて指導してしまう】なんていうことばかりでした。多くはいつも【私サイドの対応】になってしまっていたことを反省します。いつのころからかは定かではありませんが、子どもであっても、保護者であっても、職員であっても、電話対応する学校外の方であっても、出入りの業者の方であっても、「**その人の立場になって考える**」ことが大切であることを感じるようになりました。

親の気持ち・立場

私が担任を離れたのは、37歳の時です。教務主任という役職、現在本校の南　登志正　教諭や松本　茂典　教諭が行っている職務です。教務主任という仕事は、学校の何でも屋のような性格があり、ルーティーン業務のほかに、担任の業務がうまく進むよう様々な潤滑油としての働きをします。どちらかというと、後者がメインの業務です。定時に終わるわけはありません。この時我が家は、長女が5歳・長男が3歳、保育園真っただ中でした。現在と違い育児休業の期間が短かった時代ですので、妻も復職していました。保育園の送りはできるだけ遅く、迎えはできるだけ早く、妻と協力しながら子育てと仕事を両立する我が家の時代が始まりました。「妻と協力しながら」などといっても、妊娠中・産休中・出産・育休中は、圧倒的に妻の負荷が大きかったのは見逃せない事実です。私の仕事の重要性・責任もこのころからとても重くなっていきました。子育ての事・家庭の事・仕事の事・自分の事これらを、その時その時の軽重をつけながら、バランスよく、どの面でもしあわせが実現できるように・・・。苦労しました。私がとった仕事のスタイルはこうです。面談・トラブル対応等、職場でしかできない業務がある時を除き、できるだけ早く退勤する。帰宅後は子どもたちの生活時間に合わせ、子どもと一緒に就寝する。午前3時に起床し、家族が起きる午前6時までの3時間、自宅で事務系の仕事をする。学校では人とかかわる業務に集中する。朝型セルフスタイル・フレックス（佐藤造語）にしました。21時就寝3時起床6時間睡眠、健康的な生活を維持できたこと。十分睡眠をとった後の頭の冴る時間帯なのでクリエイティブな仕事が進んだこと。など、メリットもとても多かったです。それまでも、「親の気持ちになって・・・立場を理解して・・・」と強く意識して業務にあたっていました。上記のように、日々自分でやってみて、苦労してみて、はじめて「本当の親の気持ち・立場」を感じるようになったことをよく覚えています。これが、最大のメリットです。

子どもの気持ち・立場

同時に、年齢が子ども時代から離れていきますので、それまでよくわかっていた「子どもの気持ち・立場」からどんどん離れ、「大人・教師・親の立場」で子どもに接していることにも気づきました。一人ひとりの子どもをよく観察し、「気持ち・立場」をつかみ、寄っていくことに集中することにしました。その上で、「大人・教師・親の立場」で、アドバイスしたり、褒めたり、叱ったり、放っておいたりするようにしてきました。

浦和レッズが美園北小子どもたちのために様々な企画を提案してくれます。本校の特徴、中央階段をレッズと美園北小のエンブレムやマスコットで飾るという企画を提案してくれました。夏季休業中、試しに、レッズのエンブレムだけを張り付けてみました。始業式、翌日と子どもたちが目にしました。大人が考えて子どもたちを喜ばせるだけではつまらないのでこの企画をどのように進めようかと案じていました。2学期2日目の下校時、正門で話しかけてくる子がいます。「校長先生。中央階段のことだけど、レッズだけではなくて、みそきたの校章とか、きたまる（美園北小のマスコット）とかも入れて飾るといいと思います。みそきたの子どもたちにアンケートをとるというのはどうでしょう？」私が考えていたのは、私から児童会に振って全校マターとすることでした。その方法では発案からプロセスまで大人が仕組んでしまうこととなり、面白くないと悩んでいたちょうどその時にこの提案です。「じゃああなたがこの企画進めてみてよ。」と話すと、次の日の2時間目休みにタブレットをもち校長室に訪れ、プレゼンテーションソフトで作成したアンケートの企画をもってきてくれました。その後、私が大人として多少のアドバイスをし、「この週末で仕上げてきてくれ。月曜日、職員会議で先生方の承認をもらい、この企画をスタートしよう。」としました。もちろん、月曜日、朝一で持ってきてくれました。右上のものがその児童の作品そのものです。各クラスで話し合いデザインを決定し、結果を 9 月 27 日テレビ放送で発表すると同時に、考え、声を上げ、実行した企画であることを全校に紹介しました。すぐに結果をレッズに送りました。

Try putting yourself in your mother’s shoes.（お母さんの身になってごらんなさい。）

親の立場に気付き、子どもの立場を再認識したそのころ、NHK の英語 15 分番組で見たイデオムを思い出しました。in one’s shoes　**相手の立場に立つ**　どんぴしゃりでした。正門で声をかけてきた子に対して、以前の【私サイドの対応】をしてしまっていたら、彼のベンチャーのような取り組みを見ることがなかったでしょう。「モチベーションが上がっているな。」「前に動くエネルギーに満ちている。」「このまま歩かせたら高いところまで歩きそうだ。」自身にそんな経験がなくても、【in one’s shoes】想像力をはたらかせてコミュニケーションすることにより生み出されるものは大きなものです。私はおじいさんですが、まだ、孫がいません。送り迎えに来ていただいている、おじいちゃん・おばあちゃんの立場・気持ちも【in one’s shoes】想像してお声がけします。

本校職員は、年齢・性別・経験等それぞれ立場は様々です。私が職員に対して接するコンセプトは、“その人のよさにだけフォーカスする”です。職員もそれぞれの人間性のよさを発揮し、子どもたち、保護者の皆様のよさにフォーカスしていきます。職員一人ひとり、現在の立場でできる【in one’s shoes】のマインドで教育活動に取り組んでまいります。爽やかな気候となってまいりました。10 月もよろしくお願いします。